ある喫茶店の集い

どせいさん

今日は快晴、梅雨も明け、春と夏の境界とでもいうべき太陽が、空を照らしている。

こういう日は普通ならば、絶好のドライブ日和であると言える。
そう思い外の景色を見ると、隣の車は屋根にサーフボードを括り付けて走っている。
そう、そして今、自分はたるんだお腹をハンドルでこすりながら、
長年の相棒である古ぼけたセダンを運転している。
目的地は、何の変哲もないただの喫茶店だ。

このままドライブ気分でのんびりと、目的地まで向かおうかな？

そんな長閑かな考えは、後部座席からの鈴の音のようなかわいい声で中断された。
「すみません義兄さん。あと十分ぐらい後には到着しておきたいんですけど」
後部座席には、乗客である小学生程度の外見の女の子がやや焦った表情をしている。
髪型はショートヘア、ヘアピンを挟むだけでリボンなどはしておらず、服装も黄色いワンピースに女児用ジーンズで、とても活発そうな印象を受ける。

「ふむ、このままのスピードでも、ちゃんと20分前には到着するよ？」
それに、自分も彼女も喫茶店で何かやらなければならないということもない。

この子たちとただ座って、話を聞いて、何か軽食をして、それだけだ。

「そうなんですけど、実はそれに加えて少し前から催してきて・・・」
年端もいかぬ少女が、もじもじと体をよじらせている様子が見える。
表情もなんだか思い詰めているようだ。
これは、ひょっとしたらひょっとしてしまうのかもしれない。

「なんだ、小用を足すのを我慢するのが、まだ苦手なの？」
「ええ、何とか少しでもちゃんとおしっこを我慢できればいいんですけど・・・」
どうやら、事態はやや急を要しつつあるようだ。

まあ、向こうでゆっくりするのも選択肢としては悪くないか。
そう思い、「わかった。もう少し飛ばすとしよう」と返事をすると、
私は車のアクセルを少し踏み込んだ。

軽く前屈姿勢になって、腹部がハンドルを圧迫する。
先ほどまでのんびりと車を走らせていた理由は、本当はドライブを満喫することだけではなかった。
最近でっぷりと大きく太り始めた腹が、ハンドルの下部分に当たって少し運転しづらいというささやかではあるが男の自尊心に関わる理由も、実はあったのである。

「ちょっと兄さん、最近太りすぎなんじゃないの？」
そして話が終わってドライブに集中しようかと思った途端に、座席にもう一人座っていた乗客が私の体形にケチをつけてきた。
学生服を着た、色白ではあるがやや筋肉質な外見をした男子高校生だ。
高校一年生で髪は黒、顔つきもいわゆるイケメン寄りというやつであろう。
学生服も乱れなくきっちりと着こなしている。
スマホを片手でいじりながら、やや脂肪の付き始めた私の身体をじろじろと見ている。

「そうかなあ？　個人差こそあれ、他の人だってだいたい同じようなものじゃない？　全身に脂肪がついて、こう体形がぽっちゃりとしてくるものだよ」
負けじと私も言い返す。これでもビール腹にならないように酒も減らしているし、身体への負担を考えてタバコも吸っていないのだ。
「そうだけど・・・」
「まあ、そういえばそうだよね。ジュンにはまだそういうのは早すぎる話だった。朝立ちも性欲処理もどっちもまだロクに処理できないようなジュン君に、は、」
そう言い返すと、少年はぐぬぬといった表情になった。

と思ったら、
「ああ、ほんと車内がタバコ臭いよ兄さん。フィルター洗浄してる？」
そう言って高校生の少年は、せっかく車内にクーラーを効かせてあったというのに窓を全開にし、初夏のもう一つの産物である蒸し暑さを車内全体に呼び込んできた。

会話の流れが都合悪くなると、常に逸らす。こいつの悪い癖だ。
何故わかるかって？　それは、こいつが私にとって数少ない肉親だから。
年齢で言えば十歳も違うけれど、同じ腹から生まれ、同じ屋根の下で食事をし時には喧嘩をし時には支えあって、生きてきたので、考えはだいたい分かる。
しかし、ジュンは時々こうやって後先考えずに動くのが、たまに瑕である。

会話を逸らされたことによる不快感と、むぅっとした湿気による不快感。
湿気によって生じた汗が、自分のの背中をすぅっ、と流れ落ちていく。

二つの不快感を全身に感じながら、自分はある喫茶店に向かっていた。
どこにでもある、普通の個人経営の喫茶店だ。
駐車場が店の隣にある、少し大きめの喫茶店。

しかし、そこに集まる面々は、後部座席で騒いでいるこの二人も含めて、奇妙な事この上ない集団なのであった。

何故奇妙なのかって？　なぜならば、

1つ目の理由として、我々がその喫茶店に行くのは、今回が初めてではないから。
先々月の6月1日も、先月の7月1日も、そして今日である8月1日も、
とにかく毎月1日に、私は彼らを同じ喫茶店に連れて行っている。

要するに、定期的な会合だ。

そして、もう一つの理由。
「ああ～、もう！　カケルが車内でじゃーじゃー漏らしたらどうするの⁉　さっさと喫茶店まで急いでよね！　そんなだからあんたはバカ兄貴なんだよ！」
と、私の耳元で思いっきり怒鳴り声をあげている男子高校生こそが、
実はこの私の妹であり、

「ああ～！　早くしてくださいよ義兄さん！　ぼくもう漏れてしまいますよ！」
全身をゆらゆら揺らし、顔を真っ赤にしながら後ろから必死に訴えかける小学生女子が、その結婚相手、つまり私の義弟だからである。

二人はある時を境に、姿も年齢も性別も、全く別の存在になってしまった。
我々がこれから訪れる喫茶店でかつて起こった、そして、現在もいまだ世界中で起こっているという、ある奇妙な現象によって・・・

喫茶店の駐車場も、もう我々にとってはなじみの場所だ。
今駐車場にある車は、このセダンを除けばオーナー夫妻の車だけ。
時計を見るとまだ例の時間まで30分はある。やはり、一番乗りだったらしい。

いつもの場所に車を止め、でっぷりとしたお腹を何とか車内から運び出すと、
後部座席にいる二人はもう店内へと駆け足で向かっていた。
全身についた脂肪の重みを再認識しつつ、よっこいせ、と後を追った。

喫茶店の前にある黒板には、団体貸し切り本日閉店の文字が書かれている。
春夏秋冬でデコレーションの変わる黒板は、地域のマダムたちにも好印象らしく、
時々同じ喫茶店を訪れると、いつも近所の学生やＯＬ、主婦ばかりである。

私たちが店内に入るときも、ＯＬらしき女性がブラックボードの前で落胆していた。

カラン、カランという鐘の音とともに喫茶店に入ると、
でっぷりと太った初老の男のウエイターが「いらっしゃいませぇ♪お待ちしておりましたぁ。あちらの席にどうぞっ」とやけに陽気な猫なで声で話しかけてきた。

ウインクまで使って微笑むウエイター。
相変わらず、どんな時でも元気と茶目っ気がある人だ。

そのウエイターのおじさんに案内されるまま、
私と「妹夫婦」は店内の奥にある大テーブル席に座った。
だいたいテーブルを挟んで各三人、最大６人ほどならば座れそうな、大きな空間だ。

勿論この間、トイレに行きたくて我慢していた「義妹」は、一生懸命トイレへと駆け込んでいくのであった・・・

先ほどのウエイターが丁寧な動作で水を出し終わると、「やあ、みなさんもう来たんですね」という凛々しくも穏やかな女性の声がした。

そちらの方を向くと、だいたい高校生か大学生ほどの年齢であろう女性がいて、
私たち一人一人としっかりとした握手をした。
実は彼女こそが、この喫茶店の若きオーナーだ。
この喫茶店のことは何でも知りぬいており、私の友でもある。

ボーイッシュなスラックスを履きこなし、ボタンを少し外して胸の谷間が見えるようにしたワイシャツと、左右のそこそこ大

きな乳房に食い込みその魅力を強調する小型のサスペンダーとを着た彼女は、髪の毛もそれほど伸ばしてはいない。

彼女は我々一人一人の頬にあいさつ代わりの接吻をしてくれたけれど、とりわけ私とは長く握手をするだけではなく、その柔らかい唇で私の口をしっとりと吸ってくれた。
お返しに、と私は彼女の頬をてのひらで優しく撫でる。
これが、ここ数か月間の、私とオーナーの少女との間の決まり事。
妹夫婦もその光景をいぶかしんだり気味悪がったりはしない。

そうこうしている内に、他の人たちも到着してきたようだ。
だけど、私たちはその面々を見て、会合の度にいつも苦笑いを禁じえない。

最初に入ってきたのは、女性二人に高校生一人の組み合わせなのだけれど、
顔面にまるで歌舞伎役者かと思えるほどの濃い化粧をした老婆が入ってきたからである。二人目の髪の毛を金髪にして黒々と日に焼けた高校生の男子はまあ問題はないとしても、最後の一人は外見こそ制服を着た普通の女子高生だが、その実年齢は20代ももう後半。

私はその女子高生の顔を見て、何とも可笑しくてたまらなくなった。
そうして何気なく横をみると、隣でジュンが顔面蒼白になっている。

仕方のないことだ。

次に入ってきたのは、男女の組み合わせだ。
高校生の男子と、30代の主婦と思しき女性の二人組。
ただ、ここは先月までは男二人に女一人の組み合わせだった。

何が起こったのかを知っているだけに、とても寂しい思いがする。
つい数か月前の会合でも彼はとても敬老快活な人物だったというのに、
いったいどうしてあんなことに。

ウエイターさんと話す二人の表情も、何だか冴えない感じだ。
高校生の男子が、一回り年上であるはずの主婦の頭を撫でていた。

その次に入ってきたのは、女子高生が二人におばさんが一人の組み合わせだ。

女子高生二人はとても仲の良い様子で、店の玄関でぎゅうっと抱き合ったり頬を寄せ合ったりしていた。
それどころか、テーブルに移動するまでも手をつないだまま、テーブルでも隣に座る。
その輪の中に中年の女性が加わるのは、何とも見ていて奇妙な印象があるね。

きゃあきゃあという声に何事かと思うと、可愛らしい子供たち二人が入ってきた。
ウエイターさんがうなずいているところを見ると、
どうやらこの子たちも、今回の会合の参加者ということらしい。
彼らは確か同じ学校に通っていたはず。
彼ら自身は会合にこなかったけれど、確か先月そんな話をしていた記憶がある。

髪を短く切りそろえたボーイッシュな格好の女の子が、大柄だが気弱そうな男子に対して何事かわからないけれど怒っているみたい。

次いで入ってきたのは、私の経営する事務所で働く社員二人だ。
背中まで伸びた髪の毛を根元でひとまとめにしてある、女性用スラックスにフォーマルなスールの組み合わせの端正な顔だちのなんだか格好いい女性が、大川春美。

髪の毛をワックスで逆立たせて、腕にゴージャスなロレックスの時計をつけ
スーツの胸元も豪快にはだけている、ワイルドな魅力にあふれる外見の男が、山崎秋良。

二人とも、うちの事務所に欠かせない人間だ。
王やら事務所での作業が一区切りついたみたいで、こちらに二人とも手を振って、
店側の指定した席へと座った。

その後も多くの人が喫茶店に入ってきた。
中には貸し切りに気づかないで入ってきて退出する人もいたが、
ほとんどが会合の参加者だ。

最後に入ってきたのは、成年男性一人に女子高生一人の組み合わせ。
二人とも会合には初参加であり、そそくさと席についていく。

「あ、あ、ぼん、ぼん」といきなり電子音のような声が部屋の隅から流れた。
どうやらオーナーさんが、店の奥からマイクとスピーカーをとりだしセットしたみたいだ。
「はい、これで今回参加される方は、全員です。不参加の方たちからは、すでに事前連絡がきております。それでは、え～、今回の会合を始めさせていただきます」
海上が拍手でそれに答える。

「司会進行はこれまで通りわたくし、この喫茶店のオーナーが務めさせていただきます。
まず、今回初めて参加される方が複数名おられるので、その方々からまず、現在のお名前とお立場、何故この会合に参加することになったか等、自己紹介をお願いできないでしょうか」

司会進行のオーナーはそうやっていったん話を区切ると、初参加者を待つようにマイクを持ち直した。

しばらくは沈黙が続いたけれど、ふと店内の隅にいた女子高生と男性のペアの内女子高生の方が、すっくと立ちあがってマイクを手に取った。

吉谷　桃花（17）

「ああ～、もう！　誰かが言い出しっぺになんなきゃ終わんないじゃん！
あた、じゃなかった俺、そういう流れマジで嫌いなんですけどぉ～！

で、俺の今の名前は吉谷　桃花、高校二年生。
バトミントン部所属なんだけどぉ、実態はほぼ帰宅部かなぁ～。

あの日のことで言えばさぁ、俺と友達二人の三人でぇ、よくその喫茶店で暇をつぶしていたんだけどさぁ。

スマホでフェイスブック更新してたと思ったらぁ、マジいきなりさぁ、店中が真っ白な光に包み込まれて、身動き一つとれなくなったんだよ。

んでさ、気が付いたら座っていた場所は変わってるわ、不良女どもに取り囲まれてるわ、
そいつらが全員胸を揉んだりパニくってたりしているわ、自分の身体がまさかの女子高生の制服着ているっしょ？　その上自

分の身体まで胸のある女になってたりするとか、もうそれこそ大パニックって感じ・・・ありえないから。マジで。

今？　今はこいつの記憶読んで、こいつのフリしてるっしょ。
今の自分の胸もそこそこあるしい～。女の汗のにおいが自分の身体からするしい～♡
毎日が女の花園覗き放題だ。こんないい話マジ無いから。ありえないから。

でもなんだか最近しゃべり方が変なかんじするっつーかぁ、
ていうか頭の中がこいつになってきてるのか、あた、俺、前はフェイスブックやってたのにツイッターとかスカイプになってきてるしぃ、女向けのファッション雑誌とか気になって読みふけっちゃうしさ。
それにアタシさ、女風呂とかで前ほど興奮できなくなってるっつーか・・・

まあ、自己紹介ってこんな感じ？」

吉田　清子（34）
「はい、わたくしが吉田　清子と申します。現在は、そうねぇ。この体の夫は、私がこの姿になるもう数年前にこの世を去っておりまして、わたくし今はマンション経営で収入を得ておりますの・・・

なぜ、この場にというと、何だか気恥ずかしい話になってしまうのだけれど・・・・
わたくし、いえ、ぼく、その日は家族で遊園地に足を運んでおりまし、いたんだよ。それで、帰り道にお父様とお母さまに、ここのチョコレートソーダパフェを所望すると、快く快諾してくださっ、くれたんだ。

そして、家族みんなでこの店にやってきて、ようやくてんいんさんにたのんだパフェが届いて、口に入れようとした丁度その時に、わたくしたちあの光に・・・

それで、気が付いたら店内の可愛らしいチーク材のテーブルのある一人席に座って、
口の中にチーズケーキを入れていたんだ。
いきなりパフェがチーズケーキに変わったでしょう？
もうぼく、ビックリしてしまって、はしたない話ではありますが、ケーキを吐き出してしまいましたの。
それで驚いて周囲を見回したら、わたくしの周囲におられる人たちもおっぱいやおちんちんをさわりながらおおごえでさわいでいるし、ぼくの胸にもそれなりの大きさの乳房が二つ備わっているでしょう？
しかも、ふくのうえからぼくのいまのからだにさわってみたら、ふくはおとなのおんなの人のもの、からだの大きさも先ほどまでの自分とは全く異なりますし、わたくしに先ほどまであった殿方のあの、その、生殖器官も無くなっているでしょう？

もう、驚いて気絶してしまいましたの。

ごめんなさいね。このような話。
わたくしの未熟なゆえのわがままのせいで、お父様とお母さまの人生まで、ぜんぜんちがうものになっちゃった。ぼく、いまでもわがままいわなければよかったのかなって、あの時の自分を責めたくなる時がありますの。

え？　わたくしの口調が、何かお気に障りましたでしょうか？
ええ、そのうですね。わたくし、ううん、ぼく、まだ5歳の男の子だったのでしたね・・・
ぼく、男の子だった期間がまだ短いのに、肉体が30代の妙齢の女になっちゃったでしょ？　それで、服の着方もマンション経営のことも何にもわからないから、途方に暮れていたら、あるきっかけで、この人の記憶が読めることに気づいたんですの。
それで、ご近所づきあいもございますし、女性特有のお化粧とか月の物とかありますので、相手に成りすますために記憶を読み続けていたんです。

そうしたら、いつの間にかこの身体の記憶の方が勝ってしまったみたいで、わたくしったら一人の時や、信用できる人とのこうした会合の時まで、時々こういう口調や仕草になってしまって・・・
不快や不気味に思ったんだとしたら、大変申し訳ありません。
というよりも、もう少年だった時期の幼げな話し方の方が、
意識しないと会話の中に織り込めないようになってしまっております。

第二次性徴期もまだ迎えておらず、女体への羞恥心も大人ほどは無かったのが幸か不幸か作用して、もう完全に現在の女性の人生に適合しつつあるみたいです。

そ、れ、に♪皆さま、やはり大人の女性というのは素晴らしいものですわよぉ♪
わたくし、こんなにも心地いい世界があったとは、夢にも思いませんでしたわぁ♡」

その後も何人もの自己紹介が終わり、ようやく自由時間、パーティタイムとなった。

この入れ替わり現象に巻き込まれた人間は、
同じ喫茶店を貸し切って、こうして定期的に会合を開くようになっていた。
同様の現象が世界中で発生し始めているらしく、市役所や病院、警察にもある程度対応マニュアルがあったこと、そして喫茶店がチェーン店ではなく店長の個人経験だったことが幸いし、これまで大きなトラブルは起きていない。

因みに入れ替わった人々は、元の身体の地位と現在の肉体の地位、
どちらか一方を選択できることになる。
そのため、別のケースでは社長や市長といったリーダーが二人発生したり、当選した宝くじが「二人の当選者」に半分に分割支払いされて宝くじの運営団体を相手取った訴訟に発展したりする事態にもなっているらしい。

そうしているうちに料理が出来上がったらしく、オーナーの奥さんがバイキング形式の料理を各テーブルの上に並べ始めた。
女の子の精神が入った女子高生が、満面の笑みで喜んでいる。
そして最後に、我々の座っている机に料理を運び終わると、オーナー夫人は私の真横に座り、顔をこちらに向けた。

オーナー夫人のその顔、忘れるはずもない。忘れようもない。

私がこの数か月前まで、三十数年間使い続けてきた、その顔が、そこにあった。

あの日のこともまた、忘れようにも忘れられない。
ちょうどこの日のように、自営業であることをいいことに妹夫婦を喫茶店まで送り届ける羽目になっていた私は、元々定休日で他に特に用事もないので、車内で一寝入りと決め込んでいた。

そうしてだんだんうつらうつらしてきたと思ったら、いきなり目の前の喫茶店に落雷でもあったのかという強い光が発生し、閃光に目がくらんだ。

そうして数秒間意識が朦朧として、気が付いたら喫茶店のキッチンにいた。
最初は何が起こったのかわからなかった。なぜって、自分がまるでテレビの料理番組で見たような女物のエプロンを着て、目の前ではシチューの鍋が噴きこぼれそうになっているんだから。
慌てて火は消したが、その時には自分の指の細さとか、体の動き方の違いとか、「な、なんだこれは!?」って叫ぶ甲高い声と

かが一気に突きつけられて、もう呆然と床に座りつくすしかなかった。周りの叫び声は耳に入っていたけれど、どうしようもできない。

そうこうしている内に、たまたま外を通りがかった人が救急車を呼んでくれて、
病院で横になっている内に、だんだん精神が落ち着いてきた。
しばらくは狂人扱いだったが、近くのコンビニの防犯カメラに不可思議な発光が確認されたんで、それでようやく、噂の集団入れ替わり現象に巻き込まれたんだなあとわかってもらえたようだ。

なにせ妻子ある身なのに27歳の人妻になってしまったから、家族には迷惑の欠けっぱなしだったな。妻は最初、泡を吹いて倒れそうになっていた。
娘に至っては、最初の一週間は私の愛人か何かだと思ったらしく、
役所が入れ替わり証明書を出してくれるまで口をきいてももらえなかった。
こういう現象が世界中で観測されはじめていることも、初めて知った。

他人の肉体なので、清潔にせねばならず、風呂にも入ることになった。
何とかブラジャーは脱ぐことができたが、衣服を脱ぎ捨てて現れた全裸の美女には正直目を奪われた。
淡いブロンドに染められた髪の毛は肩までかかるほど、軽くパーマを当ててあり、
もちろん髪質や毛先の手入れもきめ細やかで、指で撫でるだけでリラックスできる。

乳房のサイズも大きさ、形のバランスが整っており、
先週交わった妻の乳房よりも、ひときわ大きく垂れも少ない。
妻の乳房と同じなのは、当時の私の心理状態を反映して、肉体が興奮していることだった。
三本指でぐいと突くと、柔らかな乳房の感触と、胸の肉に何かめり込む感覚が同時に生じた。
ただ、勃起した男性のペニスを軽くこするよりも快楽はやや鈍く、あまり刺激を感じない。

乳房を揉み続ける以外の方法で女の胸が気持ちよくなるためには専用のマッサージが必要で、
単に興奮状態で乳房をぐいぐい刺激するだけではあまり快楽が生まれないことも、この時初めて知った。

体形は、腰の括れはグラビアアイドルほどではないが、若いころの妻よりも引き締まっており、臀部も桃のような艶めかしいヒップ、太ももやふくらはぎも太りすぎず痩せすぎずと、なかなか魅力的である。体型管理に苦労している妻のことを思うと、この夫人の努力と年齢ゆえのアドバンテージ、その両方に気付かされざるを得なかった。

人相も目じりは穏やかで顔のバランスも悪くはなく、人当たりがよさそうな美人だ。
目元にある泣きぼくろが、チャームポイントだと言えるだろう。

まあ、鼻の下を伸ばしているその美しい人妻が自分だということに気付いてからは、

エロス四割、申し訳なさ三割、違和感二割、落胆一割だったが。

シャワーの蛇口をひねる。
と言っても実際には数年前のリフォームで、スイッチ式に変えてしまったが。
顔に勢いよく降り注ぐ水流に、思わず「ふぅっ・・・・・」と息を漏らす。
その声のなまめかしさいに、我ながら年甲斐もなく興奮してしまった。
とはいえ、女性の快楽は男性のそれとは異なり肉体の興奮は即時的なものではなく、
股間の勃起もないので何とも奇妙な感覚だった。

シャワーの水が乳房の上に流れ落ちる感覚の不思議さは、今でも鮮明に思い出せる。

入浴時は、体はゆっくりと女性用のスポンジで洗えばいいが、
繊細な取り扱いが必要そうな頭髪と股間は、妻に教えてもらった。

妻は私の現在の肉体に少し嫉妬の念を覚えているらしく、
特に乳房の形や腰の括れに対しては、男性の私よりもまじまじと注視していた。
よその奥さんの身体に腹を立ててもどうしようもないぞ、と見かねて言うと、
「女には女のプライドというものがあるのよ」と返されてしまった。
そう言われてしまうと、ニセ女の私には何も言い返せない。

服は妻とオーナーの奥さんとの体格が似ていたから何とかなったけれど、
問題は化粧をはじめとする女性ならではの技術やマナー。
化粧品は共有できてもメイクの技術は共有できない。

入れ替わり現象の中には相手の記憶が読めるタイプのものもあるらしいが、私はあまりそういうことはしたくなかった。奥さんのプライバシーを覗くのもまずいし、記憶ののぞき見し過ぎで人格まで混ざる危険を冒したくもなかったからだ。

とはいえやはり生理用品の使い方や女性特有のマナーなど妻子に聞くのも億劫なことがあり、インターネットでもよくわからないものは奥さんの記憶頼みだった。

ちなみに、記憶を読めるようになったきっかけだが、
「ふぁああああんっ!?
おれ、トイレの中で、ションベン拭いてりゅだけなのに、気持ちイイッ!?
女の胸も、ジンジンピリピリして、すっごくイイぞっ！
はぁ、はぁ、おれ、イっちゃう！　もう、だめ、だ、めぁああああああんっ!?

ああ・・・俺・・・はぁ、はぁ、わた、お、私・・・そう、私、香苗っていうのね・・・年齢は、今年でちょうど30歳、家族は・・・・・・」

簡略化すると、だいたいこんな感じである。
この姿になってから各地の入れ替わり現象研究について調べたところによると、どうやら子供の身体になった人たちも、子供たちなりの浅い絶頂で読めるようになるみたい。

その結果かどうなのかわからないのだけれど、かつては「俺」だった一人称が「私」になってしまった。とはいえ日々のちょっとしたマナーについて娘にイライラされなくなったり、妻とのレズセックスで受け手側をやれるようになったりしたのも確かなので、怪我の功名といってもいいのかも。

「ああ、おなかの子、こおんなに大きくなったんですね♡」

やや老いの始まりつつある声で、私はふと追憶から現実に引き戻された。
中年男性の容姿になってしまったオーナーの奥さんが私の大きなおなかをさすり、

本来は彼女のこどもであるはずの胎児の存在を感じ取っている。

その横に、アルバイトのウエイトレスの子と入れ替わったオーナーが現れ、
自分の子種で身籠らせた子供の温もりを感じ取っていた。
傍から見ると、ただのアルバイトの女の子と、赤の他人である事務所の所長が、
喫茶店のオーナー夫人の大きく膨れ上がったマタニティーボディをペタペタ触って頬ずりしている図になる。

喫茶店のオーナーとは女性の身体になってしまった者同士であり、
また、奥さんの身体をお預かりしている立場ということもあって、
頻繁に連絡を取り、時々逢う友人となった。

奥さんの身体が妊娠発覚するまでの間は、女子大学生になってしまったオーナーさんともレズセックスしていたことは、オーナー夫人の公認こそ得ているが、私の妻には今でも内緒だ。

オーナーの奥さんが妊娠していたのが発覚した時は、不安の方が大きかった。
たかがニセ女の私に、妊娠や出産なんて本当にできるの？
本当にこの私が生んでしまってもいいのだろうか？
この子の親は本当のところ、オーナー夫婦なの？　私なの？　誰なのだろうか？

ここでも妻に助けられた。

ただ産むことだけを考えなさい。産んだ後のことは産んだ後のことです。
気に病んでばかりの自分の目の前でそう、きっぱりと言い切ってくれた。

妻の勧めで酒やたばこを断ち、マタニティーサークルに入って何とか上手くやっていけてる。
時々そのサークルのメンバーから「あなた、なんだかボーイッシュな性格ね」と言われて、ドキリとすることもあるけれど。

自分のなすべきことは、ただ、この子を産むこと。
身体が元に戻らないのならば、この子の母親としての務めを担い果たしていくこと。
今の私には、それ以外のことは考えられない。手を付けている余裕がない。

何はともあれ一歩一歩、確実に歩んでいこう。